

# 売国政策からの脱却

国の財政破綻は即、国民の借金であろうか？  
国民の資産でもある国の借入金は、  
国民監視の上、国民資産として有効活用すれば済むだけの話ではないか？！

これほどのパラドックスはない。債権者と債務者の取り違えが、本来債権者である国民の判断力を狂わして、自虐思考に陥らせてしまっている。

本来、債権者である国民は、国家に対して債権者請求権を行使して当然である。つまり、行政の機能、事業の見直し、国家経営の効率化を請求監視する権能が付与されている。当然であるがそれをしてこなかった。あるいはそれが出来ない」と勘違いをさせられている。

これが財務省の『国民の借金』という意識の刷り込みが、メディアを使って大々的に推し進められている。そうではない。『国の借金』国民の資産』なのである。

であるから、国は借金を減らすために、民営化をするというが、それは真つ赤なウソであって、民営化することによって国の資産が目減りすることを意味する。そうであつてはならない。国の資産が目減りすれば、国民の債権は実質的に回収不可能になることを意味する。

郵政民営化や、高速道路民営化は莫大な資産が、国から民間に移動したことを意味する。未だその経営権である株は、国有であるから国の資産であるとも言えなくもないが、

一旦売り払われてしまえば、実質的にも民間のものになる。その民間たるや一部の利権企業に株を取得されてしまえば、一企業にその莫大な資産が移動し、その他一般国民の債権は大幅に回収不可能になると言うことである。

そればかりではない。ゆうちよ銀行などは、大量の国債を引き受けている。勿論、原資は一般国民の積立金であるから、間接的に一般国民の債権には違いないが、その管理

は株を取得した一企業に委ねられてしまう。もしも、その株が外資の手に渡ったら、実質的に外債となる。これが危険と言わずして何が危険と言えよう。

その魂胆が、民営化の本質である。

日本高速道路株式会社の莫大な不動産資産も、その経営権を委ねた株主のものとなり、株主が外資であれば、外国資産となるのであって、国に対する債権者たる国民は債権回収の手だてを失うこととなる。

これは何としても阻止しなければならぬ。阻止する有効な手だては、第一に国民の意識が、債務者意識から、債

権者意識に転換することを要する。

債権者なら誰しも、債務者の破綻を怖れる。それは債権回収を不能にしてしまうからである。その意味で、国を破綻させてしまうことは、国民の債権を回収不能にしてしまうことに繋がる。その意味で国の財政破綻を防止しなければならぬと言いうことになる。

国債発行はやむを得ないと考えるべきである。それは財政出動がやむを得ないと言うことであつて、それが確実に内需拡大に繋がるようにする必要がある。

奄美大島の隣に喜界島があります。六十年前、ここには心を締め付ける物語があります。九州と沖縄の中間に位置する喜界島は、終戦間際の特別攻撃の出撃中継地点となっていた。積み荷は二五〇キロの爆弾、空へ飛び立つことは、死ぬことを意味していた。

夜明け前に出撃する若い隊員達に、地元の娘たちは野の花を贈った。でも隊員達のは忍びないとの思いから、ある者は空から花を落とし

## 特攻花

その花の種が風に舞い、今も喜界島の飛行場脇に毎年咲き続けている。島の人たちはこの天人菊という花を「特攻花」と呼ぶようになり、平和を願う花として今でも大切にしている。今年出版された27才の女性カメラマンの写真集を見、私は今、これを泣きながら書いています。



(有)西川経営オフィスサービス

中村会計

事務所便り

2009年11月26日 (木) N080

地域から明るい未来を作ろう